

令和5年度第2回 オーテピア高知図書館サービス計画推進委員会 議事概要

1 日時:令和5年 10 月 13 日(金) 14:00～16:30

2 場所:オーテピア 4階 ホール

3 出席者:

[委員]加藤委員長、篠森副委員長、齋藤委員、常世田委員

[オーテピア高知図書館]杉本高知県立図書館長、高石高知市立市民図書館長 ほか

4 議事次第

(1) 開会

(2) 議事

①オーテピア高知図書館サービス計画の取組状況について

[資料1・2]

②ビジネス支援サービス及び健康・安心・防災情報サービスについて

[資料1・2]

③その他

[資料 3]

【委員】

議事1について、委員の皆様のご意見をいただきたい。

【委員】

●ビジネス支援サービスについて

就農などのセミナー・相談会がコンスタントに実施されているのは、非常に良いこと。実施すること自体が目的にならないようにしてほしい。目的が何かということを明確に意識した上で、単純にそれを繰り返すだけではなく、毎回そこからの気づき、提案も含めたブラッシュアップを意識していただきたい。『今後の取組』に、「まちかど就農相談の、より効果的なPR方法について検討する」と書いてあるので、そういったことも考えられているのだろうと思いつつ、念のため申し上げる。

●健康・安心・防災情報サービスについて

医療・介護従事者等応援フェアはなかなか良い。コロナの最初の頃はこういうのはあったが、それ以降忘れられたようになっていく。今は、インフルエンザが非常に増えたり、薬がないなど、医療関係の人は大変な思いをしながらやっているというのが現状だと思う。こういうことをオーテピアでやれるというのは時宜を得ていると思った。また、『成果と課題』の欄(資料2-P.4)に、「専門機関から広報活動のために連携図書展示を実施したいという要請が多数あった」という記載があり、「多数」というのが良かった。

●行政支援サービスについて

次に、行政支援サービスについて。『主な取組』の欄(資料2-P.5)に、「市立学校教職員向けの団体貸出の運用を開始。5月の校長会にて周知」とある。学校教職員に役立つかどうかと、生徒に浸透するかは非常に大きなポイント。オーテピアが学校と学校図書館にとって本当に役立つか、一つの回答をここで示せるかという感じもする。教職員がいかにオーテピアをうまく利用してくれるか。また、オーテピアとともに学校図書館について有用性を感じてくれるか、またオーテピアを利用しようという意識を持ってくれるかが、これからの公共図書館の生き残りにかかっている。子どもたちの情報収集能力など様々な分野の発達という意味でも、この部分はとても大事だと思う。そういったことが前進していけば良いと思う。

高知市民図書館の分館・分室を視察した際に少し話したが、高知市が土佐山学舎を特にプッシュしているのであれば、学舎に県外からも集まって来ている生徒たちに、高知市あるいはオーテピアに自分たちは十分に目をかけてもらっていることを理解してもらえよう、学校図書館との連携の中でより手厚いサポートを行うことがあっても良いと思う。将来的に高知のファンになってもらえると考えると、図書館が役割を果たすことができることを示したいし、市の行政にも知っていただきたい。市がプッシュしている学校に手厚いサービスを行い、場合によってはそれがモデルになって、他の学校からも手が挙がるようになるのであれば、手厚く対応しても良いと思う。そういう形で、学校側からオーテピアが頼りにされていくことをモデル的にやってみてはどうかと思う。

●ティーンズ・サービスについて

ティーンズ・サービスの「高校生ビジネスプラン・グランプリ プラン作成講座」は、ビジネスプランの作り方をはじめ、データベースを含む図書館資料の活用方法等を紹介することで高校生の将来に役立ち、図書館の利用につながるものとなった。ただ使ってみましょうと言うだけでなく、ビジネスプラン・グランプリで、自分たちが作り出したアイディアなどを分かりやすく提示し、最終的に高い評価を得ようと努力をしていく中で、図書館の資料が具体的に役に立つことを感じる機会として非常に良い。学校の調べ学習とはレベルが違う図書館の有用性が感じられる機会であったと思う。

『今後の取組』の欄(資料2-P.8)に、「高校訪問などの機会に、教職員や生徒向けの図書館活用講座についてPRを行う」とある。様々な講座が必要だと思う。このような講座には、新聞の読み比べ講座があるかと思うが、インターネット記事を読み比べる講座があっても良いと思う。記事の内容が正しいか、他の媒体ではこのように報じているがこちらの媒体ではどうかといったことを考え、理解できる。記事の内容が単一ではない方が良いということを体感してもらうという意味でも、ネット記事を含めたニュース記事を比較する講座が有効かと思う。

●多文化サービスについて

多文化サービスについて。香美市には外国人の方が400人ほど住んでおり、多くはベトナム人だと聞いた。是非、そのような方たちに向けたサービスをするべきだ。高知県は都市部に比べて賃金が安いことが一番大きい問題。高知に行っても駄目だと外国人に選ばれなくなる危

機感もあり、高知県全体の計画の中でもかなり重視していることをまず理解する必要がある。香美市は農業関係で来ている方が多いかと思う。農業関係に限らず、一般の製造業でも大人数を抱え、その方たちに具体的な福祉や教育の対応ができる実力のある企業は、高知県内にどれほどあるのか。例えば香美市立図書館、「かみーる」を想定してほしい。「かみーる」にはグループで話す場所がある。事業所に数人ずつ入っている農業関係の労働者たちが、休日に仲間と会う機会が作れるし、ベトナム語の本が一定置いてあれば、自国の文化に触れることができる。カウンターに、「通訳アプリを使ってベトナム語の応対ができます」とベトナム語で書いてあれば、彼らは「かみーる」を通じて、自分たちは香美市からウェルカムの姿勢で迎えられていると実感すると思う。事業主には図書館のPRをしておき、事業所へ到着したらできるだけ早く図書館に連れて来てもらう。そして、図書館は土日も開いていてきちんと対応してもらえることや、手続きなどの困りごとについて相談すれば、すぐには解決できないものは時間がかかっても市役所などから資料を取り寄せてくれることなどの話をすれば、香美市や事業主の姿勢が伝わる。そのことがSNSを使って母国に発信される。彼らはマイナスな情報もすぐ発信するが、良い対応をしても発信してくれるようになれば、賃金が十分でなくても、きちんと自分たちに対応してくれるということが母国に届き、香美市、あるいは高知県が選ばれる可能性が増すと思う。

9月の共同通信社の調査によると、全国の自治体の首長のうち8割以上が外国人材は必要と認識しており、外国人は必要ないという自治体は1%しかなかった。それくらい、どこの自治体も外国人材の確保を意識している。その中で図書館がきちんと役割を果たせるか。「かみーる」単独では、例えば、ベトナム語の本をどうやって仕入れたら良いかという点で困ると思う。例えば、オーテピアが、書店のルートを通じた仕入れ方などについて助言すれば、教育だけでなく、商工労働、農業などの分野で必要なものを県内の図書館が提供できるという可能性についても行政に気づいてもらえることにつながると思う。

●図書館利用に障害のある人へのサービスについて

サービス対象者への広報について、日本経済新聞、読売新聞2社に取り上げられ、多くの方にサービス内容をPRすることができたのは良いことで、今後も継続していただきたい。

●市町村支援について

巡回訪問や、依頼を受けて訪問するなどの支援があり、生涯学習課と定期的に打ち合わせで実施しているとのこと。このことについて、行政職出身の館長は、市町村の首長や幹部職員とつながっている場合が多く、そのつながりにより、図書館担当部局だけでは声をかけにくい自治体のトップへの働きかけが可能になってくる。館長は高知県図書館協会長としての立場もあり、その立場なら行きやすいということもある。そういったことを適切に利用しながら振興計画を進めていただきたい。

●高知市全域サービスについて

分館・分室カルテを作成して進められていることを前回もお聞きした。地域に喜ばれるとい

うだけでなく、頼りにされていると考える。どうしたら地域に喜ばれるのか、また、オーテピアのPRにつながるか、動きを館ごとによく練って進めていただきたい。非常に大きな力になっているので、よろしくお願いいたします。

【委員】

●サービスのアウトプットについて

皆さんが取り組んでいるサービスは、サービスの種類と実績を見るとかなりのレベルに到達しており、他の図書館と情報共有すべき時期に来ていると思う。専門的なスキルと経験の積み上げを専門職の資質向上につなげることと、他の専門職と共有していくことが重要な仕事、役割の一つ。自分の職場の中だけで経験を積み上げるのは職人であって、専門職との違いはその点にある。図書館の学会や学会誌では簡単なコラムのような原稿や論文を常に募集をしているが、大体は原稿が少なくて困っている。そこで皆さんの活動を文書化し、活動をアピールしていくことはとても重要なこと。自分の仕事を客観的に表現することが、仕事を見直すことにもなる。他者に伝えることにより、対象化、意識化されていないことや、自分の立ち位置、技量を客観視できる。それが視察者の増加、研修の講師として皆さんが呼ばれるという次のステップへつながり、知事、市長など行政の管理職や、県議会議員、市議会議員へのアピールになる。これが二次的効果で、オーテピアの生き残り策になっていく。

●広報について

もう一つは、マスコミへの露出。取材を待っているだけでは駄目で、地方新聞の記者の名前あるいは記者室の連絡先くらいは押さえておいて、常にこちらからFAXや電話で記事にしてほしいことを流す。おはなし会や講演会など、当たり前のイベントを流しても仕方ないと思うかもしれない。しかし、新聞社、テレビ局には、記事が全くない時の埋め草を常に用意しておく必要がある。私も経験があるが、私たちから見て何でもないことを記事にしてくれることがある。何もない時に、図書館は何かありませんかと向こうが聞いてくるぐらいにしておくことが重要。何でもないことが記事になっても何の効果もないだろう、と我々は考えがちだが、知事、市長、議員の目から見ると、マスコミに露出しているだけで、図書館が何かやっていると分かり、大きな効果をもたらすので、意図的にやらないと駄目。これが、予算が増えたり人員が増えることにつながっていく。専門職として自然に考え、体が自然に動くぐらいにしておくべきだし、市や県の広報課とは、個人的にも仲良くなるべき。私が館長だった時には、図書館の職員が市長部局に異動する場合には、広報課に異動するように手を尽くした。また、他課の職員と常に飲み会をするなどのことを皆さんにもしていただきたい。

●ビジネス支援サービスについて

アメリカの図書館はビジネス支援関係の経済効果を分析して、数値で出す工夫をしている。そういうことを日本、また、高知モデルとしてできないかと話してきた。ビジネス支援のレファレンスをした後は、経済的な効果がどのくらいあったかを検証すべき。図書館情報学では、リクエストやレファレンスの効果を聞いてはいけないことになっているが、サービスを通じて親しく

なり、お互い信頼関係ができる中で、どういう効果があったか聞くのは悪いことではないと思う。そういう事例を集めれば、例えば、ビジネス支援を行ったことでその会社の売り上げが年間100万円増え、そのうちの何割かは税金で入ってくるというような推測ができるようになる。そうすると、その分、予算を増やしてくれと財政課に交渉ができる。こういう考え方を皆さんも身につけていっていただきたい。

農業支援にも取り組んでおり、素晴らしいと思う。北海道の置戸町は、ビジネス支援という言葉ができる前から林業支援を行っていた。ビジネス支援として農業、林業に取り組んでいる図書館はあるが、漁業はまだない。高知は漁業支援をそろそろ始めてはどうかと思う。

IターンUターンに関係するビジネス支援はとても重要で、仕事があれば、IターンUターンしない。高知県・高知市もUターン政策を行っていると思う。大都市圏で生活している人がUターンするのだから、本来は東京や大阪のIターンUターンを支援する機関・部署と連携して、「高知にIターンUターンすれば図書館がビジネス支援します」という情報を流すことが必要。情報提供先として例えば、地方へ移住する人たちを支援する東京交通会館や、総務省の出先機関などがあると思う。

●行政支援サービスについて

行政支援サービスはスキルや経験をだいが身につけてきたと思う。オーテピアの重要な役割の一つは市町村図書館支援。市町村図書館こそ行政支援サービスが必要。市町村図書館に皆さんのノウハウを伝えていくことにより、市町村図書館が当該自治体の公務員に対して行政支援サービスを行うことができる。市町村図書館がレベルの高い行政サービスを行うことは難しい。資料の種類やレベルから言っても、オーテピアの支援により、初めて市町村図書館がレベルの高い行政支援サービスを行うことができる。この辺りは他の県ではやっていないこと。この連携ができていなければ行政支援サービスはできない。その辺りを意識的に取り組んでいただけたらと思う。

【委員】

●数的指標について

今回の資料は4月1日から8月31日までの期間についてのものなので、この2.4倍が年間の数字としてちょうど良い計算かと思う。この見込み通りにいってほしいのは年間入館者数。90万人超えが見えてきた。95万人は達成しないかもしれないが、92、3万人ぐらいまで到達してくれると、目標へ向けて、また、中心街の発展という意味でも非常に良いと思う。

電子図書館の閲覧回数は、まだ5か月なのに令和4年度実績をはるかに超えていて、概算だと6万5千回弱ぐらいになり、令和5年度で6万5千回ぐらいであれば目標の10万回に達成しそう、これは安心材料と言える。非常に順調と感じた。

●広報について

先ほどの話と関連するが、進展状況等を広報できないか。この委員会で議論することも大事だが、これが外からも見えると良いのではないか。会議資料は公開されるが、少し難しいし、文

字数が多いと感じる。広報的観点からオーテピアの進展状況が発信されれば、いろいろな意味で広報にもつながる。県民・市民から始まり、さまざまな場面でオーテピアの進展状況を見ていただくことで、応援団も増えるかと思う。

【委員】

●数的指標について

実績については、デジタル系の数字の動向が、今後一番注目すべきものになってくると思う。これはいろいろなサービス、活動の今後の基本的な数値になってくる可能性もあるので、今後の利用状況、また、資料の充実度合いを常にチェックして、活動に生かしていただきたい。

●分館・分室と多文化サービスについて

多文化サービスでは、具体的にベトナム人の話が出たが、ベトナムの資料が日本にどれくらい入っているかは難しいところ。英語が読める方限定にはなるが、英語は必要。高知市の分館・分室には、多くはないが英語の文献なら揃っており、子どもの勉強用の資料もある。日本に来て高知で就業することになった方に、そのような資料がオーテピアだけでなく分館・分室にもあるという情報がどの時点で届いているか。聞いてもらえれば分かるということではなく、積極的に日本人や外国人の方が利用できるように、例えば、就業先が決まったとき、事業者の方が、「オーテピアあるいは近くの分館・分室に日本語学習の資料があり勉強もできる」、という情報をどの段階で届けてくれているかを考えても良い。できる限り早い時期に、委員が言われた「あなた方を歓迎しており、情報の得やすさをきちんと制度として持っています」という、きめ細かいアピールも必要なのではないか。これは外国人だけではなく、日本人の移住者の方にも同じことが言えると思う。

市民図書館の本館と分館・分室で連絡は取れているが、分館・分室同士の横の連絡が緊密に取れているか、ということも考える必要がある。

●サービスのアウトプットについて

お二人の委員が言われたことは、もう少し広く抽象化し、一段階上を目指すレベルになったということ。特に、先ほど言われた、自分たちの活動についての機関誌、学会誌での紹介・報告。これは自分の能力のアップにつながるし、今、自分がどのレベルにいるのかを客観的に評価してもらえることになる。ただ活動が続けるだけでなく、自分の活動を多くの方の参考に供し、評価を受ければ、講師としての招聘や広報につながる。図書館はいつ存続の危機にさらされるかわからないが、活動成果は有用な形で残ると思う。

それから、ネット情報と図書館の持っている文献情報との読み比べ。これは、本当の意味での情報リテラシーの向上になると思う。やってみることが大事。検索能力が低くては情報の信頼性を確かめることができないので、必要な支援が行えるように、司書は能力向上に努め、利用者へのサービスにつなげるべき。これについても、学会誌や学会へ報告するのは非常に大事なこと。

●図書館活動について

先ほどのご指摘のとおり、土佐山学舎への支援は、県・市の行政全体を見回した上でも目玉だと思う。きちんとした協力や支援を行っていくうえで、再度県・市の全体的な振興計画を確認し、図書館活動の幅をより広くし、大きなストーリーの上で考えていく。それが、行政に対するアピールとなり、基盤の強化にもなっていく。今後は、十分に思慮された活動が必要になってくるのではないかな。

【委員】

●多文化サービスについて

「高知県外国人材確保・活躍戦略 ver.3」が制定されており、その中に、オーテピアのことも出てきている。オーテピア高知図書館における多文化サービスとして、外国人や事業者等が活用できる資料と情報収集機会の充実と市町村への普及が出てきている。県内だと、圧倒的にベトナムの方が多く、4割。次はフィリピンの方で15.3%。オーテピアに今、ベトナム語の資料はどれくらいあるか。この部分がどれくらい進んでいるか。先ほども言ったが、全国の首長に聞いた結果、7割ほどが外国人材が是非とも必要と答え、必要ないというのは1%くらい。今、外国人材の受入について全国が競争している。それに対してオーテピアは今どれくらい反応を示しているか。外国人材でいうと、今や日本は見捨てられる国になりつつある。例えば、賃金が高いシンガポールや、オーストラリアは労働環境が良いとか。その点では、日本に行くというモチベーションがなくなっている。その中で、全国が必死になって自分のところに来てほしいとPRしている時に、オーテピアは立ち止まっていはいけない。どのくらい資料を受け入れてどう活用しているのか、市町村にどう提供しようとしているのか。

鳥取県境港市は外国人労働者が多い。ベトナム語の本の仕入れについては、地元の書店のルートを使って取り寄せ、配置している。境港市は、3万人もいないくらいの鳥取県では一番小さい市。感度の良い図書館はすでに始めている。オーテピアは遅れてはいけない。「かみーる」はそれをやろうとしているのだから、オーテピアも急いで態勢を整えて、支援を行う。県の中で人材確保の重要性はこれから高くなる。県が非常に危機感を持っている時に、オーテピアが素早く対応するかどうか。市町村に対しての普及をこういう形でやってるんですと言える態勢になっているのか。このことについては、チェックしておいていただきたい。

【委員】

●業務の見直しについて

報酬に見合った契約上の仕事だけをするのが従来の労働観だが、専門職の仕事はそうではない。経験やスキルをアップし、時間の短縮といった業務の見直しを自分でやっていくことが重要。そこに専門職の存在価値がある。皆さん、仕事にだいが慣れてきて、最初は集中しないとできなかった仕事がある程度ルーチン化し、30分でできるようになっている。これまでの分担、また、業務の統合化などの見直しをしなければならない時期に来ていると思う。

●多文化サービスについて

ベトナム人に対する情報・資料提供は多文化サービスだが、地元の企業のベトナム人雇用を総合的に支援するのはビジネス支援。地元の企業は何に困っているか。労働力が足りずにベトナム人を雇用するには、行政でどういうことが必要か。皆さんに情報を提供し、ベトナム人が来た時に、気持ちよく働いてもらうため、多文化サービスを行う。違うセクションごとにやってもいいが、それぞれが関連していないといけない。

一方、ビジネス支援について。企業でベトナムの人たちが気持ちよく働いて、日本で働いて良かったとなれば生産性も上がるので、これはビジネス支援の側面。だが、見た目は、ベトナム人にベトナムの雑誌を提供するという話。だから、これらを皆さんの頭の中で組み立てて、従来にはなかったストーリー、あるいは、設えを作っていく。そういうことが専門職の仕事だと思う。

●業務の見直しについて

図書館ではイベント担当が独立しており、サービスとは全く関係なく、イベントや講演会の心配をしているということがよくあった。ところが最近の考え方では、ビジネス支援系、健康・安全系のイベントというように、各業務の中で必要なイベントをやっている。そうすると、イベント単独の担当は必要かということになる。組織・業務で、シンプルにできるところはもったないかと常に考える。書類の数を減らしたり、チェックの回数をまとめられたりするのではないかな。皆さんがルーチンだと思ってやっていることの見直しを始めていただくことが重要だと思う。

<事務局 議事 2 説明>

【委員】

議事2 現場視察及び意見交換について、ご意見をいただきたい。

【委員】

●ビジネス支援サービスについて

ビジネス支援では、実施する人たちが知識を深め、顔売ることがオーテピアの存続、専門職の維持につながるという話をした。私がいた館でも早い時期にビジネス支援の準備を始め、館長になってからも継続した。専門的な司書の必要性をどこまで行政が理解しているかと言えば、多くの自治体がほとんど理解していない状況かと思う。だから今、正規職員の司書の割合がものすごく減っている。20数パーセントくらいになり、以前と比較するとすごく低い。なぜかと言うと、新たな課題は出てくるけれども、定数は増えないので、どこかを切らないとその課題に対応できない。となれば、真っ先に人員削減の対象となるのが図書館という話が現実になっている。

そうは言っても、司書や経験と知識を持った職員がいなければ図書館は回らない。ではどうするのか、その一つの答えがビジネス支援。なぜかと言うと、他のサービスと比べて、具体的な成果が分かりやすく、漫画で成功体験の事例が出せる程度はフィードバックができる。それが

ら、経済団体、金融機関、試験研究機関などに対してアピールができる。アピールをすることによって、商工団体の方から県や市のトップの方や議員に、図書館でビジネス支援を受けて非常に助かっているなど、具体的にプラスになった事例を伝えてもらうことで、図書館の存在価値が上がっていく。プラスになる支援を行う分野について、関係機関をある程度把握しておき、図書館で相談を受けた際に、例えば、企業なら試験研究機関や金融機関の窓口で電話して、今、図書館で相談を受けていて、具体的に検討していただけたらと思うので、今からそちらへ行っただいただいても良いですかなどとつなぐ。それくらい顔の見えるつながりができている職員を育てようとするなら、頻繁に人事異動するようでは困る。鳥取(県立図書館)だと今、ビジネス支援の顔は小林館長。ビジネス支援といえば彼、彼女と言われる職員が何人か存在することによって、図書館の専門的な価値が上がる。要は、図書館が県や市の課題に対して実質的にプラスを提供できる機関であり、ビジネス支援専門の職員がいるんですと言える状況を作っておくということ。

【委員】

●ビジネス支援サービスについて

資料の数値はかなりのレベルに達している。現場を見ないと、様々な状況や問題点が分からない。そろそろ、現場について担当の方から話していただく、あるいは、市立図書館の分館を見に行くという段階にこの委員会もなってきた。

私が現場を見て感じたことの一つは、ビジネス支援のデスクが独立しており、開館時間中は職員が在席しているのはすばらしいこと。ビジネス支援は筆頭サービスだと思うので、職員が在席しているのは非常に重要。皆さんは、テーマ別にデスクがあるのを見慣れているから、当然だと思っているかも知れないが、新しくできる図書館でも、建築屋や図書館員が勉強しておらず、相変わらず長大な中央カウンター1個しかないというところもある。皆さんご存知のように、利用者の9割は自分で自動貸出機で借りていく。日本の図書館の中央カウンター方式は、少ない職員で膨大な貸出・返却を処理するため、利用者を1ヶ所に集める発想から生まれた。欧米の図書館にはあんなカウンターはなく、昔から、まずインフォメーションがあって、そして、テーマ別のカウンターがあり、そこに専門職が在席している。

日本の図書館はこういうものだみんな思っているが、オーテピアはそうではなく、将来を見据えてテーマ別のカウンター、サテライトカウンター、サブカウンターを館内に配置している。このことに、皆さんにはプライドを持ってもらいたい。

●アウトリーチ担当について

もう一つはアウトリーチ担当。各担当がアウトリーチを行う時に一緒に行って、先方の組織と話をまとめる切り込み隊長のような役割。これが高知モデルで他の図書館の参考になるので、きちんとした論文でなくても、実務報告のような形にまとめて、図書館界に対する報告をぜひ行ってほしい。委員は、スキルや経験が整っていけば、各担当がアウトリーチを行うという時期に移行していきだろうと言われるし、私もそう思う。しかし、まだ慣れてない状態や、また、先方のハードルが高そうという時は、切り込み部隊があることはすごく有効だと思う。

●展示等について

それから、展示が丁寧にされている。展示はすごく手間がかかる。表紙を見せて展示している資料を借りられたら、すぐに補充するなど、担当が目配る必要がある。そういう仕事をしたことのない偉い方は、その大変さが分からないかもしれない。現状維持はとても大変。ずっと同じ展示では飽きられるので、適当なタイミングでテーマを変更し、しかもそれがニーズに合っている必要がある。小ざれに作らないと意味がなく、補充の必要もある。

それから、パスファインダーをまめに作っている。これもすごく重要。パスファインダーは作るのに手間がかかるが、利用者にとっては実際に役立つ。

また、現場視察の際に展示の場所が分散されていて分かりづらいと言われたら、担当の人が「いや、ちゃんと展示のパンフレットがあるんです」と見せてくれた。パンフレットが目立たない場所にあったので、これで目立つかなと思ったら、「いえ、印刷物は結構なくなります」と。そこで皆さんにお願いしたいのは、各担当がパンフレットを作る時に、印刷して置いておいてなくなったら補充するだけでなく、概算で印刷した数と、印刷物がなくなる期間を統計でとってほしい。これは予算要求する時、基本的な資料になる。チラシを100枚印刷したら1週間でなくなるということは、担当の方にとっては大したことではなく、ルーチンでやってるとするのはよく分かるが、そのことも自分たちの仕事の効果の証明になるので重要。以前、鳥取県立図書館は、ハローワークからパンフレットをもらい、なくなったらまたもらうということを何度も繰り返すうちに、ハローワークの印刷の予算がなくなったという有名な話がある。すごくインパクトがある話なので、ぜひこういう話につながってほしいと思った。

●行政へのアピールについて

遠回りしていると感じるかもしれないが、マスコミに取り上げられたものが、実は知事や市長にすごくインパクトがあると話した。今日の説明の中で、高知県中小企業団体中央会が発行している組合等活性化情報誌という宣伝PR誌を見せていただいた。その中にオーテピア高知図書館のビジネス支援を活用して事業計画を作ろうという記事が掲載されている。なかなか上手な紹介をしてくれており、最後に、あらゆるビジネスシーンに丁寧に寄り添おうとしているスタッフの姿には感銘を受けましたとある。このような記事を印刷して、市長の秘書室、県議会の事務局、議員の待合室に届けておく。そういうことが重要。第三者機関が評価してくれているものが市長、議員、行政のトップの方たちがほしいもの。税金を使って、行政がちゃんとサービスを行っていますというものがほしい。もしかしたら、知事が記者会見でこういう情報誌に掲載されたと言うかもしれないので、そういったことにぜひ地道に取り組んでいただきたい。

【委員】

●健康・安心・防災スペースについて

健康・安心・防災スペースを拝見させていただいた。非常によくできてると思ったので、もっと宣伝してはいかがかと思った。

オーテピアの存在感を示すという意味では、ビジネスとは別の難しさがある。健康、特に、メ

ンタル系、心の悩み等は調べたい人がだいが弱っている状態からのスタートなので、なかなか積極的にという分野ではない。組み立てをうまく考えないといけない。ブックリストはいろいろなところで拝見するが、今回、面白い調べものガイドがあった。NDCの見方から始まって、ブックガイド、インターネットでの調べ方、県内の相談機関、その他の情報源、最後にオーテピアの健康・安心・防災情報デスクが書いてある、非常によくできた調べものガイドだった。ビジネスのようにこれから頑張るぞという意味をお持ちの方に対するサービスとは違い、もう本当にいっぱいいっぱい状態でどうしようかという方に対するサービスとしては、ブックリストをお示しするだけではなく、例えば、相談機関を示したり、カウンターに来ていただいても良いですよというアピールの方法は非常に重要だと思った。

メンタルヘルス、あるいは認知症に寄り添った初期段階の対応は、県民・市民の健康維持に非常に大きな効果があると思う。がんについては、胃が痛くて胃薬を飲んでいたら転移したという話を聞く。そういった例は典型だが、初期にいろいろなところに相談すれば治癒に向かうということも多い。こじらせると重篤になるという意味では、県民・市民の健康を守る非常に大きな仕事をされている。

特に、ご家族も巻き込み、悩みが深いものに認知症とひきこもりがある。ひきこもりについては、棚を作っているいろいろな相談機関のパンフレットや本が置かれており、非常に良かった。あえて言うと、大人の発達障害の棚へはもう少し誘導してほしい。棚をご自身で探せるような方ばかりではないと思う。

次に、個人的に非常に良いと思ったのは、介護離職を防ぐブックリストがあったこと。どう介護するかが一段目。その上の、さらに介護者の離職を防ぐという、もう一段上の構造に切り込んでいる。これは県内の状況を考えると、非常に有意義な取組。前半に話したが、このような会議の場だけでなく、今取り組んでいることの広報がもっとできたら素晴らしい。オーテピアに来れば見ていただけるものではあるが、心の悩みやティーンズ・サービスに関しては、学校との連携等を踏まえて、学校図書館にこれらのチラシを置いてもらうなど。メンタルの話は人とは共有しにくいことなので、密かに学校図書館等でパンフレットを取ってオーテピアへ来て調べるという風にできたら、より全県的な健康の増進にもつながる。

【委員】

●防災情報サービスについて

オーテピアは津波避難ビルになっている。実際に災害が起こった時、オーテピアは何人収容できて、どれくらい持ちこたえられるのか。発電機で、電源がどの程度の時間確保できるのか。そして、ここへたどり着く時に障害があるかなどの情報を利用者にいつでも提示していることが、高知県の場合は非常に重要。仮に、開館中に震災に遭っても慌てることはなく、ここにいれば大丈夫という情報が重要。そういう時期に差ししかかっている。それから、子どもたちに対する防災の教育。オーテピアには、備蓄がどのくらいあって、何人程度がどのくらいの期間避難でき、電源も確保されていて外部と連絡ができると伝えれば、非常に大きな安心感を与えられると思う。そのようなハード面もアピールしておく必要がある。これは他の公的な建物もそうだと思うが、オーテピアの建物もアピールしておいたほうが良い。

それから、町内会の話もさせていただいた。例えば、町内会の役員を引き受けることになる
と必ず防災訓練の話が出てくる。突然言われると、どうしたら良いか分からない。実際に震災
に遭った場合に、自分が落ち着いていられるか分からないし、情報が何もないといった意見が
出てくる。けれど、これは図書館だけが関わる問題ではなく、他のいろいろな担当部局が関わ
らなければいけない。防災の備え、災害時の行動、準備その他に関する情報が町内会組織から
個人に届くようになれば良いと思った。図書館から関係課までは届いているが、そこから先の
連携ができてないという話があったので、オーテピアが災害時にも有効に機能するというアピ
ールも含めて、外部に情報を伝えるべきだと思った。

●健康・安心・防災スペースについて

先ほど言われたように、健康管理、医療関係が非常によく準備されている。ブックリストの作
成については、実際にその知識が必要な方と、病気の方を介護される方の情報を考えれば、い
ろいろな切り口でのブックリストが作れるのではという話をした。加えて、安心、医療、その他
の情報は孤立したものではなく、他の階の別テーマのカウンターとの関わりもあるので、スム
ーズに連絡できるように。それから、先ほどご指摘があったが、心の病気に関するブックリスト
については、学校などの教育関係者、その他の相談所等が参考にしてほしいリストを積極的に
発信していくことが大事。そして、実際に行っている様々な活動も、もっと宣伝して良いと思う。
例えば、この問題はティーンズ・サービスとも関わりがあるので、やはり、組織の区切り方、扱い
の範囲、担当者の関係も考えて、もっと合理的に情報発信ができるような改革が必要かもしれ
ない。

●ビジネス支援サービスについて

ビジネス支援は話を聞いてなるほどと思った。一番目に、見えて効果が出る可能性のある支
援により、図書館の存在意義を認めてもらうということも大事。そして、先ほど言われたように、
実際にビジネスをされる方にとって気楽に相談でき、あの人に聞けばという職員を養成するこ
とが大事だと思う。

今回は館内の話を聞いたが、ビジネス支援は他の市町村図書館ではどうなっているのか。ビ
ジネスに何を含めるかは難しいと思うが、他の市町村図書館、また、分館・分室にも、相談をし
たい方が来館されると思う。その時の情報提供などに関して、どういう連絡網を作るかが重要。
そういう面でも、新しい方向へ一歩踏み出すことが要求される時期になったと思う。具体的事
例や活動状況の報告、評価を知ってもらうため、公表し、マスコミに取り上げてもらうことは大
きな活動。そういう面で、委員の言われた図書館職員の削減問題や、ビジネス支援の成果を広
く共有してほしい。そうしないと、この厳しい時期に館の維持が難しいと思う。

【委員】

●サービス計画推進委員会について

もう少し現場の話を聞いて、現場とやりとりをしたい。やはり、今の段階はそれが必要だと思
う。報告を見ると、自分たちで考え自分たちで動き、課題の抽出を的確にできるところまで進

んでいる。説明の時間を多少省いてディスカッションをし、部門ごとに具体的なことについて、将来的なことでも良いので、しっかりと話ができるようにしたい。今日、こういう形式でやってみた結果、話を聞いてキャッチボールする部分をもう少し拡充するように、次回以降やっていただけるとつながりやすいと思ったので、そのことをお願いしたい。

●パスファインダー等の更新について

ブックリスト、パスファインダーについて、オーテピアには古いものと新しいものがあるが、鳥取県立は2020年頃に大改訂をした後ほったらかしになっている感じだった。先日、市長訪問に際して、3年前のパスファインダーを持っていても迫力がなくて使えないので、直してくれと言って二つほど直してもらった。現在は2023年版になっている。

日付が古いと、手に取った人が読まずに返してしまうようになるときがいずれ来ると思う。賞味期限は人によって違うと思うので、一律に新しくする必要はないが、そろそろこのリストは賞味期限が切れそうだなと思ったら、適宜新しくしておいてほしい。特に、ビジネス支援と健康は、テーマ自体がどんどん新しくなったり、新しい資料が提供されたりするという状況があるので、改訂を意識的にやっていただければと思った。

【委員】

●パスファインダー等の更新について

以前の委員会が出た、業務負担という点を考えると難しいと思うが、私も新しいことは非常に重要だと思う。皆さんには釈迦に説法だと思うが、これだけの資料費を使って毎年本を買っているのに、2020年のパスファインダーを置いていたら、この3年間で買った本はどうしているんですかということになりかねない。冷たい言い方になるが、行政論ではそういうところがある。資料費を正当化する意味でも、これだけ資料を集めたので常に最先端を追求していきますというアピールはしないといけない。そこは無理筋だと分かっているが、今は県・市議会からも支援してもらい、資料費が確保されてる状況なので、最新の情報を提供できることに意義があるというアピールができれば良い。

●分館・分室、市町村図書館との連携について

皆さんの話にもあったが、ビジネス支援、健康・安心・防災情報のオーテピアにおける蓄積を、市民図書館で言えば分館・分室に、県立図書館は、高知県内の高知市以外の市町村の図書館にどのようにつないでいくかが次の課題。「かみーる」のように勢いがあるところは、自らの努力もあって、上手く連携できるかもしれないが、その段階に達していないところもあるので、全県的なサービスの進展の観点からすると、高知市以外の市町村にお住まいの方が地元の図書館に行かれた時に、どの程度の情報に接することができるかを長期的に考えていかなければいけないと思った。

【委員】

●会の在り方について

世の中の状況も変わるし、図書館の位置付けも変わりつつある。我々も、図書館は進化しないといけないと思っている。だから、この委員会もこのような形式で良いのかということについて、検討すべき時期だと思っている。ただ、人が集まることを考えると、なかなか難しいところもあるので、その辺りを加味して考えていただきたい。

●パスファインダー等の更新について

新しい情報をせっかく持っているのに、その新しさを活かせないのはまずい。アップデートというか、いろいろな情報の更新を心がけていくという形になる。世の中の変化がこれだけ早くなってしまうと、出版物が後を追いかける傾向になる。その上で、さらに資料の整理が遅れ、実際に手にした時にはもう古い情報でしかないという状況だけは避けたい。その辺りは大変だと思うが、頑張っていたきたい。

●資源の組織化について

それぞれのテーマ別のカウンターで様々な業務を行っているが、独立したカウンターだけで処理できることは少ない。先ほど言われたような業務の配分、割り当てや組織の見直しも含め、どういう形になっても、横の連絡がうまくいくと良い。例えば、2階で調べものをしたとき、3階にも関連のコーナーがあるという情報が利用者にスムーズに伝わる、そういった連絡網、面の組織化は難しいが大事。例えば、ブックリスト、パスファインダーの作成は、図書館にある知的財産を専門の知識を生かしてどのように組織化していくかということに加え、それが少なくとも実用的で、また、ニーズに合っているということも最低限満たさなければいけない。なおかつ、利用した成果をいろいろな方々にアピールして納得させることができる、そういうものを目指す高度な段階に今、差しかかっている。

●分館・分室、市町村図書館との連携について

分館・分室、市町村図書館から積み上げた形で、オーテピアが成り立っているが、その上で、オーテピアの力をフルに発揮し、情報を整理して分館・分室や市町村図書館に合理的に提供することによって、利用者への貢献を図る。壮大なサバイバルの期間に、公立の機関は突入していると思う。生き残れる図書館を目指して、頑張っていたきたい。

【事務局】

ご質問をいただいたベトナム語の資料の所蔵状況の説明をさせていただきたい。

【事務局】

現在、ベトナム語の図書は228点あり、アジア系はインドネシアが53点、中国が488点、韓国語が719点という状況。

【委員】

ベトナム語やインドネシア語の本はどのように収集されているか。

【事務局】

外国語の本を専門で取り扱っている書店からまとめて購入している。選書に関しては、国際交流員の方に見ていただいたりもしているが、こちらも選書の時に結構苦勞していることがあり、今後の課題。

【委員】

境港市の場合は、地元の書店が持っているルートで仕入れている。例えば、「〇〇〇等はどうか。」

【事務局】

仕入れについては、書店商業組合とのやりとりになるが、こちらからお願いして、組合の中で外国語の本に強いところから仕入れてもらうことができるかもしれない。

【委員】

数字だけを聞いてると、所蔵冊数がまだ相当足りないという印象。1,000冊くらいが一つの言語のイメージではないかと思う。最低それくらいは持ってないと、市町村から依頼があった時に一定数が貸し出せない。例えば、「かみーる」が頑張っている時に、不足したら貸せると言えるレベルの所蔵冊数は、一言語5,000冊。さらに、1年に200冊ぐらいいは受け入れていくイメージだと思う。今は漠然とした段階だが、この後、先進的に取り組んでいる市町村は助けることができるというレベルまで取組を進める必要がある。先ほど紹介した県の外国人材確保についての戦略 ver.3にオーテピアの役割について書いてもらっているにも関わらず、取組ができていないという話にならないように、少し急いで、どのようにしたら良いかを検討してみしてほしい。

【委員】

予算配分は、人口比が1つヒントになる。人口の中に何%いるか、そのパーセンテージに応じた形で予算配分すれば、誰からも文句を言われぬ。今回のベトナムの方たちの件については、県の施策として打ち出されている。

図書館は文部科学省の管轄だが、文部科学省には補助金がほとんどないので、他の省庁の補助金を狙う。その省庁の縦割りに該当する県や市町村のセクションと連携業務を行って、補助金をそちらで取ってもらう。

今回は労働者の補填、ベトナム人の雇用に関連する政策。おそらく県でも関連施策があって予算がついているのではないかと。浦安での感覚から言うと、ベトナム語は単行本より、雑誌や新聞の方が、より役立つ感じがする。

今から40年前の1982年、私は日本人がほとんどいないようなアメリカのサンディエゴへ調査に行った。その図書館に入ろうとしたら、中から東洋系の女性が出て来て、ちらっと見たら「主婦の友」を持っていた。アメリカの地方都市で「主婦の友」を持っている人とすれ違ったの

で、思わず「それはどうしたんですか」と聞くと、その方は日本人で、家族の仕事の関係でサンディエゴに住んでいた。日本人などいないので、駄目元で、「主婦の友」を取ってくれないかと言ったら、すぐに取ってくれたと。皆さんは分かると思うが、雑誌は1冊の値段は安くても、年間になるとそこその金額になるので、日本の図書館は年度の途中で新しい雑誌は取れない。でも、アメリカではそういうことをやってくれる。聞いたこともないような外国の雑誌を取ってくれる。その懐の深さがアメリカやサンディエゴについての印象を良くする。そういう感覚を検討する必要があるのではないか。

【委員】

今、話をお聞きして思ったのは、実際にベトナム人の方から、こんな雑誌を取ってくれないかという要望はあるのか、またそういうアンケートをしたことがあるのかということ。実際に聞き取りから始めてみるのも良いかもしれない。母国語の本を読めるのは、海外にいる者にとっては大きな心の安らぎになり、大事だと思う。一番望ましいのは、タイトルと要約ぐらいはベトナム語で読める方が図書館員にいらっしゃることだが、それはなかなか難しい。ある程度日本に滞在し、日本の事情も分かっている(外国の)方に、具体的に、どんな雑誌が人気があって、どのような層の方に読まれてるかということなど、日本人にはなかなか分からないことについての聞き取りから地道に始めるのが一番良いと思う。

【委員】

鳥取県立は、以前から環日本海諸国の本を大量に受け入れて、なおかつ新聞と雑誌も、他の図書館が入れていないくらいのレベルで受け入れている。私の世代では、言葉を知るには新聞のイメージがあるが、新聞は徐々に使われなくなっている。けれど、雑誌はまだニーズがある。雑誌については、今の人たちはスマホを見るから要らない、という感覚があるかもしれない。でも、一定の大きさがあり写真が載っているものは、見ていて楽しい。だから、雑誌は結構ニーズがあり、大学生の留学生も(図書館へ)来て見ている。先ほどの国際関係の団体の方たちを通じて、ベトナムの方たちにどんなものを置いたら良いかと少し聞いてみたり、2、3種類受け入れて反応を見て、増やすか、どのように進めるかを考えたりといったことで良いと思う。そのルートを確認したら、今度はベトナム語の資料を入手したい市町村に、このルートを確認するという説明もできる。今はまず、オーテピアでそういう部分を開拓し、市町村図書館が外国人材への対応について頑張ろうと言った時に、きちんと指導できる実力を蓄えておいてほしい。それから、現物を見に来た時に見せられる物を揃えておいてほしい。あとは、翻訳アプリの使い方に少し慣れておき、外国の方が来られたら実際に使って、その場で慌てないような準備をしておけば良いと思う。態勢ができたなら、「かみーる」がやろうとしている時にはきちんと伝えてあげてほしい。

それから、先ほど漁業の話が出たが、インドネシアの方など外国の方が多分いると思う。漁業も結構分断されているので、一つの事業所には2、3人ぐらいしか勤めていないパターンが多い。今後、市町村でサービスを始める時には、インドネシアの方を対象とすることが多くなると思う。農業と同じようなサービスを漁業でもやりませんかと提案できるような実績を「かみー

る」を通じてつくりたい。

【委員】

新しい話題でいろいろなコメントをいただいた。まだまだ話はあるが、時間の都合でここまでとしたい。事務局の方には会のあり方自体も含めて、今日出た意見を参考にして図書館運営を進めていただきたい。

それでは議事3「その他」について、事務局からお願いします。

【事務局】

資料3

今後のスケジュール

来年度、6月に令和6年度第1回サービス計画推進委員会を予定している。